

## 郷原街道の歴史

現在の県道原洗馬停車場線（通称：郷原街道）は江戸時代に整備された道路で、当時は北国西脇往還と言いました。

慶長19年（1614）、当時の松本城主小笠原秀政によって整備され、善光寺の参拝客で多くの人々が利用したため、善光寺街道とも呼ばれました。

現在の郷原区一帯は、善光寺街道の宿場として整備され、おおいに賑わったようですが、明治35年（1902）の篠ノ井線開通に伴い、旅行者を泊める宿場としての機能をほぼ失いました。



大正4年の郷原街道『写真は当時の郷原青年会による武者行列』  
(記念誌 ふれあいの郷 ごうばら)

街道を北へ進むと、原新田のJA松本ハイランド農協広丘支所北のY字路に追分石標が現存します。南から来る三州街道との合流地点で、松本方面から来た人へ道案内をしています。

この石標は嘉永2年（1849）刊行の「善光寺道名所図会」にもしっかりと描かれており、街道には天秤棒を担ぐ人、牛馬を曳く人など、大勢の通行人や農作業をする人、茶屋で休憩する人など、様々な人々の様子が描かれ、当時から賑わいのある重要な交通の分岐点だったことが伺えます。また名所図会には松の木が植わった塚が2つ描かれており、現在その場所には、一里塚跡の石碑が建てられています。



原新田公民館に隣接する公園内に一里塚跡の石碑